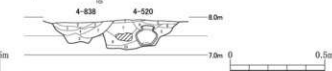
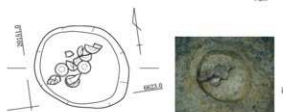


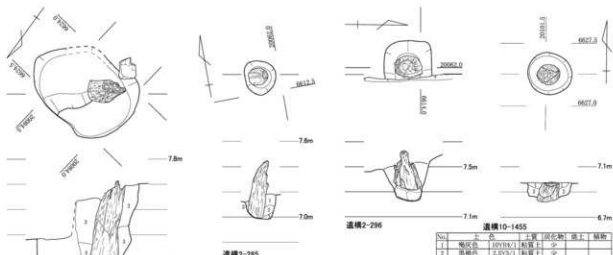
連構9-123



No.	土色	土層	炭化物	雑土	薪物	薪谷石 (cm)	木の端の石 (cm)
1	黄灰色	2.074/1	粘質土	少			少(±0.6)
2	灰白色	0.9/4	粘質土				
3	黄褐色	2.075/4	粘質土				少(±0.6~1.0)
4	黄灰色	2.074/2	粘質土				
5	赤褐色	0.976/3	粘質土				
6	黄褐色	0.976/2	粘質土				

No.	土色	土層	炭化物	雑土	薪物	薪谷石 (cm)	木の端の石 (cm)
1	黄褐色	2.073/1	粘質土	多	多		
2	黄褐色	0.976/1	粘質土	少	多	少(±0.2)	
3	黄褐色	2.074/1	粘質土	少	少		少(±0.2)
4	黄褐色	2.073/1	粘質土	少	少		少(±0.3~1.0)
5	灰色	2.072/1	粘質土	中	少		少(±0.0前後)
6	黄褐色	2.072/2	粘質土	少	少		少(±0.0前後)
7	黄褐色	0.976/6	粘質土	少	多		少(±0.0前後)
8	褐色	0.977/6	粘質土				少(±0.0前後)
9	褐色	0.976/4	粘質土				少(±0.0前後)
10	褐色	0.975/1	粘質土	少	少		少(±0.0~2.0)

図125 埋設遺構② (S=1/40・1/30・1/20)

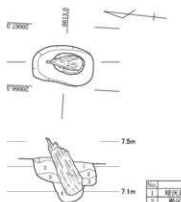


遺構2-285

No.	土色	土質	炭化物	植土	植物	厚さ(cm)	その他の尺(cm)
1	にじみ黄褐色	2.5V4/2	粘質土	少	少	少	少(φ2.0-2.3)
2	黄褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少	少	
3	黄褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少	少	

遺構9-148

No.	土色	土質	炭化物	植土	植物
1	オリーブ褐色	3.5V2/2	粘質土	少	少
2	黄褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少
3	オリーブ褐色	3.5V2/2	粘質土	少	少
4	黄オリーブ褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少



遺構4-6019

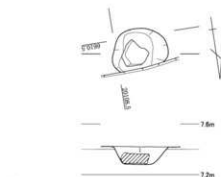
No.	土色	土質	炭化物	植土	植物	厚さ(cm)	その他の尺(cm)
1	暗灰褐色	2.5V4/2	粘質土	少	少	少	少(φ2.0)
2	褐色	3.5V3/1	粘質土	少	少	少	少(φ2.0)
3	オリーブ褐色	2.5V4/2	粘質土	少	少	少	少(φ2.0)
4	灰黄褐色	3.5V4/2	粘質土	少	少	少	少(φ0.3)
5	灰黄褐色	3.5V3/2	粘質土	少	少	少	少(φ0.3)
6	黄灰色	2.5V4/1	粘質土	少	少	少	少(φ0.3)

遺構4-810

No.	土色	土質	炭化物	植土	植物
1	黄褐色	2.5V3/2	粘質土	少	中
2	暗灰褐色	3.5V2/2	粘質土	少	中
3	黄オリーブ褐色	2.5V3/2	粘質土	少	中
4	黄褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少
5	黄灰色	2.5V4/1	粘質土	少	少

遺構2-261

No.	土色	土質	炭化物	植土	植物	厚さ(cm)	その他の尺(cm)
1	にじみ黄褐色	3.5V4/2	粘質土	少	少	少	少(φ2.0-3.0)
2	暗灰褐色	2.5V4/2	粘質土	少	少	少	
3	黄オリーブ褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少	少	
4	灰色	3.5V4/1	粘質土	少	少	少	少(φ0.2-0.3)



遺構4-5033

No.	土色	土質	炭化物	植土	植物	厚さ(cm)	その他の尺(cm)
1	黄褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少	少	少(φ0.3)

遺構10-1063

No.	土色	土質	炭化物	植土	植物	厚さ(cm)
1	黄オリーブ褐色	3.5V4/2	粘質土	少	少	少
2	にじみ黄褐色	3.5V3/2	粘質土	少	少	少(φ0.3)
3	褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少	少(φ0.3)
4	にじみ黄褐色	3.5V4/2	粘質土	少	少	少(φ2.0-25.0)
5	暗灰褐色	2.5V3/2	粘質土	少	少	少(φ0.3)

図126 柱穴 (S=1/30)

方が一辺 0.4m前後の方形を呈し、礎石を有する。遺構 4 810・9 148はともに攪乱などにより不明な部分があるが、掘り方は南北に長い長方形を呈し、規模は 0.6m前後 0.5mである。深さは、遺構 4 810が 0.7mで、遺構 9 148が 0.4mである。遺構 2 261は、掘り方が 0.5m 0.3mの南北に長い長方形であり、その底面が二段に掘り込まれる。遺構 4 6019は、0.7m 0.4~0.5m・深さ約 0.5mの掘り方内に、0.3m 0.2mの角柱が据えられる。遺構 10 1063は、平面形が東西に長い歪な楕円形を呈し、その規模が 0.7m 0.4m・深さ約 0.2mの掘り方内に、礎石のみが残存するものである。

その他 その他の遺構として、樋・集石遺構・炉などがある。

樋は、東西に延びる砂利敷道路を横断して埋設された暗渠である(図 127)。砂利敷道路の高上げとともに、何度も敷設し直したことが窺える。遺構は 2 334・357の 2 基がある。遺構 2 357は、内部に竹樋が残存した。竹樋は、掘り方内上層に位置しており、道路の高上げや樋の補修の際に少しずつ高く敷設されたものと見られる。掘り方は延長 2.5m分を検出してあり、幅 0.3~0.5m・深さ 0.35m前後である。遺構 2 357の後身として遺構 2 334が造られる。遺構 2 334は、内部に丸太材が埋設される。丸太材はほとんど未加工で、2本が接される。北側の材は長さ約 1.8m・径 0.1~0.2m、南側の材は長さ 0.8m以上・径 0.15m前後であり、ともに両脇を石や杭で固定している。掘り方は延長 2.8m分を検出している。その幅は一定せず、0.7m前後の部分と 0.35mの部分がある。深さは 0.25m前後である。

集石遺構は、土坑中に多くの礫を集積するもので、遺構 4 521・525の 2 基を図示した(図 128)。遺構 4 521は、方形を呈する一辺 0.8m・深さ 0.5mの土坑内に、拳大~0.3m大の礫が集積する。礫は、ほとんどが笏谷石片であるが、その他の石も含まれる。礎石の根石のようにも見えるが、周辺に類似する遺構がなく、単独で位置するため、性格は異なるものと見られる。遺構 4 525は、東西を長軸とする歪な長方形を呈する 1~1.2m 1m・深さ約 0.5mの土坑内に、拳大~0.5m大の礫が充填される。礫は、ほとんどが笏谷石片であるが、その他の石も含まれる。

炉は、埋土中に焼土・炭化物が顕著に含まれるもののうち、遺構 9 66・67・86・10 1061・1079の規模・形態の異なる 5 基を挙げた(図 129)。これらは、焼土・炭化物の顕著な堆積が認められる以外に、炉であるという確実な根拠を欠くものであり、焼土・炭化物を廃棄・集積した廃棄土坑なども含まれているものと考えられる。ただし、砂利敷道路西側の区画に、一定量の取瓶・鞆羽口や鉦滓などの鍛冶に関連する遺物を、16世紀中葉~後葉の遺物とともに認めることができる。そのため、北庄城築城以前において、ある程度の規模の鍛冶活動が行われていたようである。なお、土坑の頂で扱った遺構 9 31も、埋土は顕著な焼土層からなり、その中に鉦滓などが含まれていた。遺構 9 66は、攪乱のため平面形態が不明である。遺構 9 67は、南北に延びる溝状を呈する。その規模は、長さ 0.5m以上・幅 0.4~0.6m・深さ 0.05m前後である。遺構 9 86は、攪乱のため平面形態の不明な部分がある。その規模は、南北 0.8m以上・東西 1.1m前後・深さ 0.5m前後である。埋土中には炭化物焼土などの他、0.2m大の礫や炭化した木材・竹などが含まれる。遺構 10 1061は、円形を呈する径 0.2m・深さ 0.05m程度の小規模なものである。遺構 10 1079は、北側が調査区端にかかるため不明な部分があるが、東西 1.3m前後・南北 1m以上・深さ約 0.2mの方形ないしは長方形を呈するものである。

その他に、調査区のほぼ中央南側にある杭列を挙げる(図 104・129)。これは、深さの揃う径 0.3m前後の小穴 6 基が、1.5m前後の間隔で一直線上に並ぶもので、柵を構成したことが考えられる。また、遺構 4 606(図 129)は、径 0.2m前後・深さ約 0.4mの小穴で、埋土の大半が炭化米からなる。(御蔵)

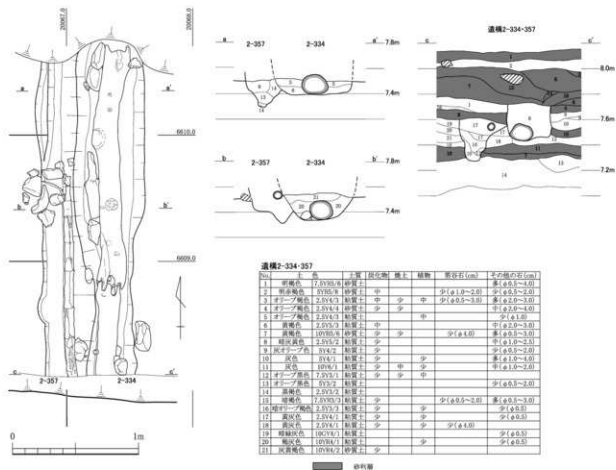


図127 樋 (S=1/30)

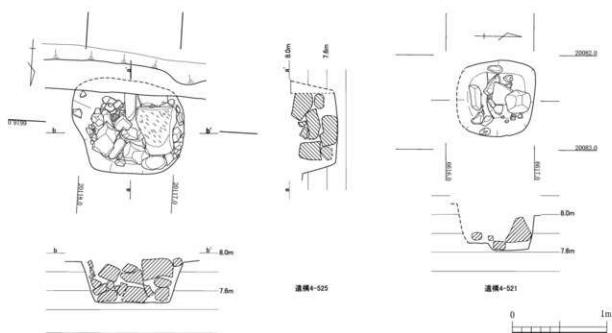
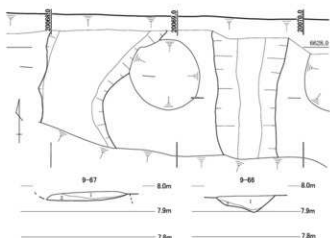


図128 集石 (S=1/40)

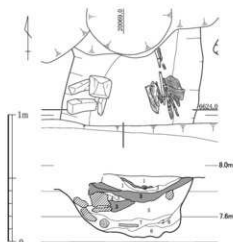


透視9-68

No.	土名	土質	図記號	積上	積物	厚さ(m)	その他(m)
1	底層土	7.1VY7.2	1	中			
2	表層土	7.1VY7.2	1	多			

透視9-67

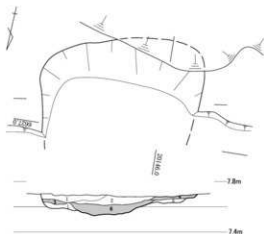
No.	土名	土質	図記號	積上	積物	厚さ(m)	その他(m)
1	底層土	7.1VY7.2	1	中			少(4.0-5.0)
2	表層土	7.1VY7.2	1	多			少(4.0-5.0)



透視9-66

No.	土名	土質	図記號	積上	積物	厚さ(m)	その他(m)
1	底層土	7.1VY7.2	1	中			少(4.0-5.0)
2	表層土	7.1VY7.2	1	中			少(4.0-5.0)
3	底層土	10.1V2.1	1	多			少(4.0-5.0)
4	表層土	10.1V2.1	1	多			少(4.0-5.0)
5	底層土	10.1V2.1	1	少			
6	表層土	10.1V2.1	1	少			
7	底層土	10.1V2.1	1	少			
8	表層土	10.1V2.1	1	少			

■ 図記號-積上の観察位置



透視10-1079

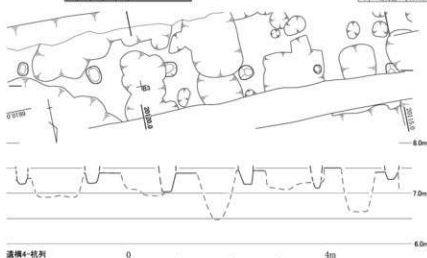
No.	土名	土質	図記號	積上	積物	厚さ(m)	その他(m)
1	底層土	10.1V2.1	1	少			
2	表層土	10.1V2.1	1	中			
3	底層土	10.1V2.1	1	中			
4	表層土	10.1V2.1	1	中			
5	底層土	10.1V2.1	1	少			
6	表層土	10.1V2.1	1	多			

■ 図記號-積上の観察位置

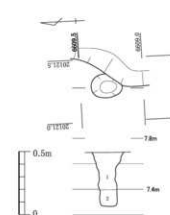


透視10-1061

No.	土名	土質	図記號	積上	積物	厚さ(m)	その他(m)
1	底層土	10.1V2.1	1	少			少(4.0-5.0)
2	表層土	10.1V2.1	1	多			少(4.0-5.0)
3	底層土	10.1V2.1	1	少			
4	表層土	10.1V2.1	1	少			少(4.0-5.0)



透視4-杭列



透視4-606

No.	土名	土質	図記號	積上	積物	厚さ(m)	その他(m)
1	底層土	10.1V2.1	1	多			
2	表層土	10.1V2.1	1	多			

図129 炉・その他 (S=1/15・1/30・1/75)

区画 砂利敷道路や区画溝、石列などから窺える土地区画の変遷の状況を詳述する。土地区画は、区画にかかわる遺構の重複関係などから7つの段階に分離し得た(図130)。以下、段階ごとの様相を順に説明する。なお、区画される屋敷地などの内部の様相については、詳細を明らかにし得なかった。

段階1 区画にかかわる遺構は、南北にのびる溝状遺構 2 452・4 860・4 866・10 1147(図133)と、東西にのびる溝状遺構 10 5037A・4 912・4 913がある。このうち、溝 4 860・4 866は、約3〜4mの間隔でほぼ平行にのびる。その間の部分は、砂利敷などは確認されないが遺構密度が希薄になることから、道路の機能を果たしたことが考えられる(道路1)。溝 4 860・4 866は、幅約1.2〜1.9mであり、深さは、大半が削平を受け僅かに底部を残すのみであるが、残存状況の良い部分では約0.68mを測る。溝 2 452は、4 866の東側に位置する。幅約0.85m、深さ約0.15mを測る。溝 10 1147は、道路1の東方約30mにて平行して位置する。幅、深さともに約1mを測る。溝 10 5037Aは、調査区の中央北端に位置する。検出長8.1m・幅0.6m・深さ0.23mを測る。調査区南端に位置する溝 4 912・913は同一の溝と考えられる。ともに幅は0.53mを測り、深さは僅かに底部を残す程度である。

溝 10 5037Aと溝 4 912・4 913は、底面の絶対高がほぼ揃い、平行に位置する。これらは、底部付近が辛うじて残存する程度であり詳細が不明であるが、道路1・溝 10 1147と直交する位置関係にあり、東西に長い長方形の区画を想定することができる(区画1)。想定される区画1の面積は367㎡を測る。道路1と区画1内部の検出面の高さを比較すると、区画内部の方が僅かながら高いようである。なお、南北にのびる溝に比較して、東西にのびる溝の規模が小さいことは、想定した区画の南・北辺は中仕切りのようなものであったことを示すのかもしれない。

段階2 この段階になると、直線的に南北に伸びていた道路1は大きく改変される。道路幅は倍近くに拡幅され、調査区南側で西に直角に曲げられる(道路2)。道路2は、後世の改変により、部分的に砂利敷や路盤が消失している。道路2の西および北辺には、溝状遺構 2 297・4 802・816などの側溝がある。道路の東端には側溝が確認されず、石列のみが確認される(石列1)。石列1は、未調整の笄谷石や河原石から成り、大きさに規格性は認められない。石列1と溝 4 802の位置から、道路2の幅は約8mを測るものと捉えられる。道路2の側溝は、度重なる再掘削がなされている。特に、コーナー部分での改修が著しく、溝の対応関係を把握することが不可能であった。そのため、2 297・4 802・816は同一の側溝と捉えられるが、南北にのびる溝 4 802と東西にのびる溝 2 297・4 816と分けて扱う。溝 4 802 図132は、幅1.94m、底部幅0.4m、深さ1.1mを測り、断面形は逆梯形である。溝 2 297・4 816から復元される幅は約2m、深さ1.87mを測り、断面形は蒲鉾形である。コーナー付近には、溝 2 344・345のような部分的な再掘削も認められる。

道路2の西側には、調査区北辺付近に、東西にのびる溝 9 180(図12 1・132)がある。検出面での幅2.2m、底部幅0.48m、深さ1.28mを測り、断面形は逆梯形である。溝 4 802と接続することが推測されるが、接続部分に16世紀後半代の井戸 9 15があるため不明である。溝 9 180に改修の痕跡は認められない。

道路2東側には、石列1から約38m離れて、南北にのびる溝 4 600がある(図133)。規模は幅2.05m、深さ0.76mを測り、断面形は蒲鉾形である。この溝は、後に砂利敷道路(道路7)造成に際して一度埋め込まれるが、その後再掘削されており、比較的長期的にわたる継続的な利用が窺える。

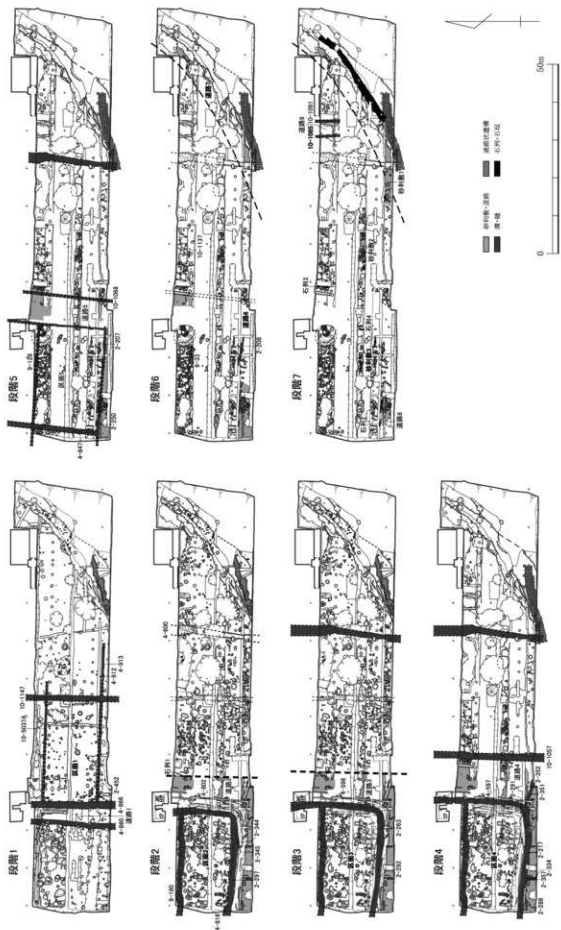


図130 区画の配置 (S=1/1,000)

道路2と溝9 180から、東西に長い長方形の区画を想定することができる(区画2)。区画2の西側を画する施設は調査区外になる。検出した部分の面積は約325㎡を測る。なお、吉野川に下る通路状遺構は、段階1には出現するものと見られるが、段階3～5の中で板石敷通路へと改良される。

段階3 この段階は、道路の改変を捉えたもので、区画そのものに大きな変化はない。道路の改変状況は、西・北辺に沿う側溝がそれぞれ東・南へと移動して再掘削され、同時に砂利敷が東に拡幅されるものである(道路3)。部分的に残存するのみで不明瞭ではあるものの、石列1の東方約1mに平行して位置する石列を道路3の東端縁石とすると、道幅は変化せず約8mのままである。南北にのびる側溝4 598(図132)は、幅1.38m、底部幅0.3m、深さ0.82mを測り、断面形は逆梯形である。この溝は、壁面に板材を当てて護岸されている。東西にのびる側溝2 292は、推定幅約1.5m、深さ0.48mを測り、断面形は蒲鉾形である。コーナー付近には、溝2 263のように部分的な再掘削が認められる。この段階の区画は、道路の若干の移動により僅かに拡大する(区画3)。区画3の確認し得た部分の面積は、378㎡を測る。

段階4 この段階も、道路の改変を捉えたものである。前段階に引き続き、西・北辺に沿う側溝がそれぞれ東・南へと移動して再掘削される(溝4 597・2 217など)。道路の東端には、新たに側溝10 1057が設けられる。両側に側溝を持つ道路となり、道幅は約10mと拡大する(道路4)。南北にのびる側溝4 597(図132)は幅1.82m、深さ0.88mであり、東西にのびる側溝2 217は幅1.85m、深さ0.66mである。共に断面形は蒲鉾形を呈する。コーナー付近には、溝2 288・291などの部分的な改修が認められる。道路4東の側溝10 1057(図132)は、幅1.9m、深さ0.52mを測り、断面形は蒲鉾形である。区画4の確認し得た部分の面積は432㎡となる。

道路4には、コーナー部分に路面を横断する溝2 351・352がある。溝2 351は幅0.32m・深さ0.28m、2 352は幅0.53m・深さ0.43mを測る。これらは雨水などを側溝へ排出するためのものと見られ、路面に開口する部分には板などを架けて暗渠としたものと推測される。重複関係から溝2 352より溝2 351が先行するようである。木樋2 334・357(図127)も、この段階には機能したものと見られる。

段階5 これまで道路西側の側溝は幅1.5～2m前後であったが、この段階の側溝2 207・250は、上幅1.27m・底部幅0.28m・深さ0.89mへと規模が縮小する(図132)。東側の側溝10 1068も幅0.72m、深さ0.33mと、前段階に比して規模が縮小する(図132)。東側溝の床面には、拳大の笄谷石が敷き詰められる。溝2 207と10 1068の間隔は約7mであり、道路の幅は再度縮小する。

このほか、道路と直交する溝4 847・9 128があり、区画を形成するものと見られる(区画5)。溝の規模は、いずれも幅0.5～0.8m前後、深さ0.5m前後を測る。推測される区画の面積は459㎡を測る。

段階6 北庄城落城の火災を示す焼土堆積直下の遺構面である。前段階の側溝を埋め立て、道路を嵩上げ造成する(道路6)。側溝は不明瞭となるが、溝2 208がそれにあたるのかもしれない。道路6は、北庄城落城までに2回以上の嵩上げがなされている。

道路に平行して東西にのびる溝9 33(図123)は、幅0.64m、深さ0.36mを測る。道路6とこの溝の間隔は15mに満たず、これが区画溝であるならば区画の規模が縮小したこととなる。

なお、砂利敷 10 1137は、屋敷内などに敷かれた砂利であると見られる。その端の笏谷石には被熱痕が認められる。また、石垣 は火災後の北庄城期に構築された石垣であり、その背後には砂利敷道路(道路 7) が伴うが、この道路は板石通路とともに遅くともこの段階には存在したものと考えられる。

段階 7 北庄城落城時の焼土堆積上の遺構面である。道路側溝などの区画溝は認められず、石列が区画の境となる。石列は部分的に残存するのみのため、区画は不明瞭である。

砂利敷は、道路と屋敷内などに敷いたものがあるようである。調査区西側の南端部分に見られる砂利敷は、前段階から継続する道路である(道路 8)。道路 8の北縁には石列 2がある。南北に並ぶ石列 3も道路 8の縁石となるものと見られる。また、道路 8東側に元位置を保たないものの列を成す石材が多数確認される。そのため道路 8は、東西と北へのびる T字路であった可能性がある。また、石材のなかには笏谷石製の橋が並ぶことから、道路 8に伴う側溝として備えられたものと見られる。道路 8は、2回以上の嵩上げが認められ、いずれも直径 1～3 cmの玉砂利を敷き詰めている。

砂利敷 1は、前段階から継続する道路 7の一部になるものと見られるが、その北側には聖調整備痕が残る、縦 0.83 横 0.63 高さ 0.23mの笏谷石製の板石が埋設されている(土坑 4 608)。道路に面した区画の出入り口にあたるとも考えられるが、詳細は不明である。屋敷内などに敷かれたと見られる砂利敷は、いずれも焼土面直上に直径 1～3 cmの玉砂利を敷いたものであり、部分的に複数回の嵩上げを施す箇所が認められる。このほか、調査区東側の北端には溝 10 1065・1091がある。これらは幅 0.64～0.73 m、深さ 0.28mを測り、両者間の幅は約 3.2mを測る。この溝の間の部分を道路 9とする。道路 9は、道路 7に接続する可能性がある。

各段階に認められる変化のうちもっとも大きな変化は、段階 1・段階 2の間に認められる。段階 1では、南北に直線的にのびた道路 1が、段階 2以降は倍以上に拡幅され、南側で西に屈曲する道路 2へ改変されたことが、最大の変化である。16世紀中頃のこのような変化が何に起因するのかわからないが、1568(永禄 11)に朝倉氏が足羽郡北庄橋の修理を計画して国内に用材提供を求めたこと(表 3)と関連があるのかもしれない。

段階 2～4は時間的に短期間であったものと見られるが、道路が南東に少しずつ移動しており、それに伴い道路西側の区画が僅かながら拡大していく状況が窺える。段階 5・6は、道路側溝が小規模になる以外、区画そのものの変化は認められない。側溝の小規模化は、実際の状況を確認することはできなかったが、石橋が使用された結果であると考えられる。時期的には、初期北庄城の営まれた時期に含まれてくるものと考えられる。段階 7では、それまでのような道路側溝や区画溝は認められなくなり、石列・石橋主体の区画となる。これには、北庄城落城に関わる火災後の埋め立て処理の影響もあったのかもしれない。確認される石列の方向性は、前段階までの区画と変わらない。そして、これらの方向性は、近代の排水溝などにも踏襲されている。

確認した段階 1～7の様相は、16世紀中頃～末に比定される約 50年の間の変遷である。その変遷は、区画の基準となる道路の方向性が大きく変化することがなかったため、目覚ましい変化は確認されない。しかし、度重なる道路の嵩上げや、素掘りの側溝から石橋側溝の採用など、細部における環境整備が進展していく状況を確認することができた。これまで、福井市街地における中世段階の様相は不詳であったが、今回の調査の成果により、僅かながら垣間見ることができるようになった。(佐藤)

